月刊

JMITU

ディスカ

2月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部
セガ　グループ分会　2023 年発行

No,458

2023年春闘・夏季一時金
賃上げは実現できる！

セガ初任給35％増やし30万円

春闘が始まり、大企業では、賃上げに前向きな報道があちらこちらで聞こえてきます。

昨年は、バンダイナムコが初任給の大幅な底上げを行い話題になりましたが、今年は、セガでも「セガは、2023年7月からベースアップを実施すると発表した。正社員の年収を平均で15％程度引き上げる。また、大卒の初任給は22万2000円から35％増やして、30万円にする。」というような記事が出ていました。

今まであれだけ渋っていた賃上げをこんなにもあっさりと行い本当なのかという疑いを持ってしまいます。

実際の内容については、今月末に組合への説明があります。詳細は次回機関誌でお知らせしていこうと思います。

正社員が当たり前の社会へ

社員の賃上げについてはかなり話題に上がりますが、職場では、正社員と同じように働いているアルバイトもいます。同一労働同一賃金などと言っていますが、実態は労働こそ同一ですが賃金は正社員より大幅に低い賃金です。

社員のような一時金や退職金もありません。会社は正社員と業務の責務が違うからなのだというが、業務を線引きすることは不可能なのだから希望する者には正社員にすべきです。

春闘アンケート開始

私達労働組合は、ホームページにて春闘アンケートを始めました。会社への要求や不満、賃上げ額、セガでの新たな賃金制度について意見をください。この意見をもとに会社と交渉や機関誌にのせていきたいと思います。

アンケート回答一部抜粋

今職場で特に不満・不安を感じていること。

「給与の原資は増やさず、枠組みを変更して給与アップだと誤魔化してる感じがずっと続いているので信用していないです。言葉選びや資料は正直に作ってください。」

「人事制度の見切り発車感、他社と比べて目玉となるタイトルの不足感」

新たな賃金制度について

「賃金が上がるのは良いことですが、如何せん最初の説明が分かりにくいです。月々の報酬も大事ですが、結果年間でどれぐらい貰えるのかが大事かなと。あと、家族が居る方や家賃補助を貰ってる方、退職金前借りの利用する・しないで、それぞれどれぐらいプラスになるのかイメージしづらいので、諸々のパターンちゃんと出してほしいです。今後の説明会でそれらの説明があることを願います。」

掌編小説

コーヒー

仙洞田一彦

賢三は、友達づきあいがあまりなかった。会話が苦手というか、話すことが苦痛だった。これは臆病な性格からきているのではないかと、賢三自身は思っていた。下手なことを言って、相手を傷つけたり、怒らせたりはしないか心配だった。自分では注意してしゃべっていても、配慮していても、思わぬ言葉で引っかかるかもしれないのだ。世辞も言えない社交性に乏しい人間だ。そのせいもあって、勤続年数もそこそこで、四十代なかばという年齢だが、同期の社員の中で唯一肩書がなかった。出世したいという意思もないわけではなかった。

休日であっても、独り者という身軽さがあっても、誰かと連れだってどこかへ行くということもなかった。せいぜい喫茶店でコーヒーを飲むというくらいだった。

雨の日も多くなり、寒さ温かさを繰り返し、春が近くなったことを感じさせる季節になった。賢三は風もなく暖かい日の午後、いつも行く喫茶店にいた。

すぐ後ろから声が聞こえた。なんとなく周りをはばかるようなひそひそ話なので、かえって耳を刺激した。むろん振り向くことなどしない。座るときチラッと見たが、七十代くらいの二人連れ、賢三からすると、父親世代だった。

「昨日の夜なんか、どこのチャンネルでも気球の話だよ」

「戦争かね」

「すぐというわけではないだろうけど、いやな雰囲気だ」

どうやら後ろは、現役を退いた老人の無責任な世間話、年寄りの暇つぶしのようだと思った。気球の話なら、テレビで流れているくらいだから、ひそひそ話でなくてもいいのではないかとも思った。

「気球を撃ち落とすなんて聞くと、いまにも戦争が始まりそうで、ぞっとするね」

「飛ばす方も、飛ばす方だよ。まったく、何考えてんのかね」

「気球に聞いてくれってか」

ここで二人の、抑えた笑い声が聞こえた。

「戦争に関係のある話だと、つい声が小さくなってしまう。そういうご時世かね」

「つい、な。俺たちは反対派だから、本当はでかい声で言わなきゃいけん。今は賛成派の方が声がでかい」

「まったくな。でも口に出さなきゃ駄目さ。声を上げなきゃな」

賢三は二人の声を耳にしながら、昨日の職場の夕方の出来事を思い出した。

「だからダメなんだよ。今日中に仕上げてくれ。残業してやっていけ」

課長が女性社員に言った。

「保育園に子供迎えに行かなけりゃいけないんです」

困ったように女性が答えた。

「仕事できないんだったら、辞めてしまえ」

課長と、パートで働いている女性との会話だ。似たようなやりとりは、これまでも何

度かあった。課長のひどさは周りの者も知っていた。
課長に「辞めてしまえ」と言われた後、女性が賢三の方を見た。目が合ってしまった。賢三は課が違うが、その時たまたまそばにいた。賢三はそこを離れ、自分の席に戻ってしまった。座ってから賢三はあれこれ思った。
課は違うし、あの課長のいつもの態度だ。彼女以外の部下も同じようなことを言われている。私が無口で頼りないのは、この部屋の社員ならだれでも知っていることだ。彼女だって、課長からああいう言われ方をしたのは一度や二度でないから、大丈夫だろう。辞めやしないだろう。課長は私より年下だが、彼の上司ではない。ましてや部下でもない。
何を思っても、何を考えても、賢三自身が納得いかなかった。いや賢三自身、よくわかっていた。自分が行動しない限り、自身を納得させられないことをわかっていた。
課長より年上で、勤続も長いから「そういう言い方はやめたまえ」とか「パワハラはやめろ」くらい言わなければ自分を納得させることはできない。長い会社生活で、いくらぼおっとしているような賢三でも、そのくらい言わなければならないことぐらいわかっている。
自分だってさんざん言われてきた。怒鳴られてきた。「辞めろ」と言われたことも思い出せないくらいある。最近は歳を食ってきたから怒鳴られるようなことはなくなってきたが、思いっきり皮肉を言われるようなことが多くなった。
辛さは思いっきり自分の中に沈殿している。深く傷を負っている。課長が怒鳴ったとき、自分が言われたわけではないのに、その傷の上から引っ掻かれた思いがした。だからこそ「パワハラはやめてください」と言わなければならないのだ。でもなあ、見て見ぬ振りもしみついてしまったしなあ。目が合った彼女の視線から何かを感じるのだから、まったく感じなくなったわけではないかもしれないが。もし彼女が退職してしまったら、取り返しがつかない。そう思って目を閉じると、過去にもパワハラで　辞めたと思われるのが何人も浮かんだ。
私の責任じゃない。閉じている目に力を入れて、そう断じたが、断じ切れない。
また後ろから聞こえた。
「いつの時代にもいるな、要領のいい奴。黙ってる奴。正義面して、あれこれ言うが腹は全く逆って奴ね」
「誰」
「あいつだよ、あいつとあいつ。名前が出てこない」
誰も見てないのに賢三は、両腕を交錯させて肩をすぼめ、寒くて震えたふりをした。それから向かいの椅子の上のフード付きのダウンを取って着ると、フードを被った。
後ろはもう、ひそひそ話ではなくなっていた。
コーヒーでも酔えるんだ、とフードの中の賢三は悪たれた。